

成人看護実習に「臨死期のケア」討議を取り入れた学習方法 からの学生の学び

—実習記録内容の分析から—

松本 幸子・内海 文子・高比良祥子
片穂野邦子・吉田恵理子

Nursing Students' Learning from Discussion about
Death and Dying in Adult Nursing Practice.
—Through Analyses of Students' Practice Reports—

Sachiko MATSUMOTO, Fumiko UTSUMI, Sachiko TAKAHIRA,
Kuniko KATAHONO and Eriko YOSHIDA

要 約

病院死が8割を超え、また在宅死においても看護職としての役割が期待される現状にあるが、臨地実習の場で受け持ち患者を通して臨死期の看護を学習することは困難な状況にある。そのため成人看護実習では実習の終盤に「臨死期のケア」討議を取り入れ、自己の経験や提示資料、討議を通して学習している。今回成人看護実習に「臨死期のケア」討議を学習方法として取り入れその学習内容を明らかにする目的で、実習記録内容を帰納的な方法により分析した。その結果507のコードから7つのカテゴリー、34のサブカテゴリーが抽出された。7つのカテゴリーとしては『身近な死に関する体験』『死後の家族の思い』『臨死期の看護』『死後のケア』『死の意味』『討議からの学びと発見』『看護職としての今後の課題』であった。学生は身近な臨死期の体験、これまでの実習経験、今回の討議の過程を通して「臨死期のケア」に関して多くの学びを得ていることがわかった。これらの結果を今後の改定カリキュラムにおける成人看護学教育での終末期看護の検討に活かして行きたい。

キーワード：臨地実習 臨死期 討議 死生観 死後のケア

はじめに

成人看護学では、成人期にある対象のあらゆる健康レベルにおける看護を学習する。終末期の看護については、学内講義・実習を通して学習するが、臨死期にある対象の看護を実習の中で受け持ち患者を通して学習する機会は限られている。その理由は終末期にある患者・家族の多様なニーズへの対応と残された時間の有限性のため短期間の実習での具体的な関わりが難しい等がある。また病院死が8割を超える日本の現状では、学生が身内の死を実生活の中で直接経験する場面は極めて

少ない。一方で、多くの人が亡くなる病院は終末期を迎える患者・家族の療養の場としての十分な環境が整っているとはいえず、緩和ケアの専門の施設も現在150施設程度である。

そのため、一般病棟で亡くなる患者がほとんどである現状で、看護基礎教育を終えた新人の看護職であっても日常的に臨死期の人に関わることになる。その意味において多くの人の命の終りに関わる看護職の役割は大きく、看護基礎教育においても可能な学習の機会が必要である。

学生は講義科目の中でがん看護、終末期の看護について学習し、成人看護実習では最終段階にそ

これまでの体験を通して臨死期の看護について考える機会として「臨死期のケア」討議を組み込んでいる。この討議を成人看護実習の最期に行う理由は、学生の個人的な経験とともに実習での受け持ち患者や他の入院患者の死、家族の様子や看護職の対応場面などを通して感じたこと、考えたことなど具体的に討議が行いやすいからである。

本学では平成16年入学生から改定カリキュラムによる教育を行い、その移行に対応した成人看護学、成人看護学実習を検討していく過程での資料

とする目的で、平成16年度3年次生の成人看護実習の中で「臨死期のケア」討議を学習方法として取り入れた学生の学びの内容を実習記録から分析した。

1. 成人看護実習における「臨死期のケア」討議の位置づけ

1) 成人看護実習の構成

成人看護実習は、6単位の实習を4週間の病

資料1 「成人看護実習の概要」

目的：健康障害を持つ成人期の対象を受け持ち、健康段階に応じた対象の顕在的・潜在的問題解決のために看護過程を展開するとともに、看護の機能、役割、実践方法を学ぶ。	
学 習 目 標	行 動 目 標
1. 成人各期の発達課題や、様々な健康障害を持つ対象を、身体的、精神的、社会的特徴を持つ生活者として理解する。	1) 青年期から向老期におよぶ成人各期にある患者の、発達課題と健康障害が生活に与える影響を説明できる。
	2) 健康に障害を持ちながら生活する患者の健康レベルについて説明できる。 ・急性期(クリティカルケア、周手術期)・回復期、慢性期・終末期
	3) 患者を身体的、精神的、社会的側面の総合体として捉えることができる。
	4) 患者の疾病や障害のメカニズム・経過・検査・治療について説明できる。
	5) 患者・家族の関係や健康障害に対する受け止め方を理解し、問題を解決する能力をアセスメントすることができる。
2. 対象の持つ健康に関わる顕在的、潜在的問題を解決するために、看護過程を活用して看護を実践する基礎的能力を養う。	1) 患者の健康問題に関わる情報を多角的に捉え、分析・解釈し統合することができる。
	2) 患者の看護上の問題の優先順位をふまえて抽出することができる。
	3) 患者にとっての期待される結果を導き出すため、看護計画を具体的に立案することができる。
	4) 諸検査や治療・処置の目的、方法を理解し、その援助において患者の苦痛が最小限となるような工夫ができる。
	5) 患者や家族の意欲や能力を活かしながら、日常生活援助を展開することができる。
	6) 指導者等の支援を受けながら、患者に必要な看護を安全に実施し、患者の反応を捉えることができる。
	7) 自己の思考や実施方法・内容等を、看護過程の各プロセスにフィードバックしながら評価・修正できる。
3. 保健・医療・福祉に関わる各職種の専門性と看護の役割を理解し、連携・協力しながら対象の持つ健康問題を解決する支援のあり方について学ぶ。	1) 患者・家族への倫理的配慮やインフォームド・コンセントのあり方について考えることができる。
	2) 健康レベルや患者・家族の疾病・障害の受容段階に応じて、セルフケア確立のための看護援助について説明できる。
	3) 健康教育の必要性を理解し、患者の社会復帰に関わる各職種の役割、連携・協力のあり方について知識を深める。
	4) 社会資源に対する知識を深め、慢性疾患や障害を持つ患者を支援するための活用方法を知る。
4. 臨地実習を通して、自己の学習上の課題や、看護者としての自分自身の課題を明確にする。	1) 事前学習や人的・物的資源を活用し、主体的に学習することができる。
	2) 実習を振り返り、学習上の課題や解決の方向性を見出すことができる。
	3) 実習で出会う人々との関わりを通して、看護者としての自己の課題を見出すことができる。 (服装・マナー・言葉遣い・学習姿勢・誠実な態度も含む)
	4) 実習を通して、自己の人間観、生死観、看護観を深める。

実習計画

週	実 習 内 容
1週目	学内技術実習(周手術期の看護、輸液管理、呼吸循環管理、自己血糖測定)、集団指導教室見学実習
2週目	病棟実習
3週目	病棟実習
4週目	病棟実習
5週目	病棟実習
6週目	ICU事前学習、ICU見学実習、「臨死期のケア」討議、合同カンファレンス

棟実習、2週間の学内実習・見学実習・討議から構成している。資料1

2) 「臨死期のケア」討議の位置づけと展開本討議は、実習の最終の時期に共通に学習する内容としてグループごとに行っている。資料2

2. 研究目的

成人看護実習に「臨死期のケア」討議を取り入れた学習方法からの学生の学びを実習記録から明らかにし、改定カリキュラムにおける成人看護学での終末期看護の教育内容、学習方法の検討に活用する。

3. 研究方法

- 1) 対象：平成16年度3年次生 成人看護実習 「臨死期のケア」討議に関する実習記録 64名分
- 2) 倫理的配慮：対象学生に口頭で、研究目的と結果の取り扱い、分析結果は匿名性を守り成績に関係しないことを説明し同意を得た。
- 3) 分析方法
レポート内容を一意味単位ごとに取り出し、意味する内容をコード化し類似するコードをまとめ表題をつけた。表題ごとに意味内容の類似するものをまとめサブカテゴリーとし、さらにサブカテゴリーの意味の類似するものをまとめカテゴリーとする帰納的方法を用いた。分析は

複数の教員により確認し信頼性を確保した。

4. 結果

「臨死期のケア」討議に関する実習記録の学習内容の分析から、507のコードが得られそれらの類似する内容をまとめて82の標題をつけた。さらに標題の類似性から24のサブカテゴリー、7つのカテゴリー『身近な死に関する体験』『死後の家族の思い』『臨死期の看護』『死後のケア』『死の意味』『討議からの学びと発見』『看護職としての今後の課題』が得られ、表1に示した。

5. 考察

1) 学生の学びの内容と特徴

「臨死期のケア」討議のねらいは、死に関連した自己の体験と看護職としての立場から討議することで、ケアの受け手側の思いとそれに応える看護職の役割について考えることである。討議の導入として、最初に個人としてまた家族としての体験と事前学習の文献を読んだ感想を述べ合うことから始めている。この討議では日常の中では話すことの少なかった自分の身近な死別経験を話すことで、自分にとっての身近な死の経験の意味を改めて考えることになるようである。以下にカテゴリー『 』、サブカテゴリー「 」、標題を〈 〉とし、カテゴリーごとに主なコード内容と関連させながら考察する。

資料2 「臨死期のケア」討議の展開

目的	患者・家族にとっての臨死期の持つ意味について考え、看護職の役割について理解する。
目標	1. 患者、家族にとっての臨死期の持つ意味について考えることができる。 2. 臨死期に関わる看護職の役割について考えることができる。 3. 死後のケアの意味、方法について理解できる。 4. 上記1～3および臨死期に関わった自己の体験を通して、死生観を深めることができる。
方法	1. 事前学習 文献 ¹⁾ 大島弓子「病院で看取る患者さんの死についての考察」 提示文献の他、自分の関心ある終末期ケアに関する文献を読み、自己の体験（実習および自己の個人的体験など）をあわせて、看護職の役割について考えてくる。 2. 事前学習と自己の体験を通しての臨死期に関する内容を話し合い、導入とする。 3. VTR 視聴「死亡時の看護ケア」 監修・指導：北里大学看護学部看護基礎グループ 京都科学 4. 死後の処置セット内容を確認する。 5. 自己の死生観や看護職の役割について討議し学習を深める。 寺本松野「患者さんの遺した言葉」 ²⁾ から抜粋した文章も参考とする。 6. レポート：事前学習と本討議を通して目的・目標に関する学習内容・評価・考察した内容をレポートする。
時期・時間 構成	成人看護実習の最終日前日 2コマ 学生6～12人 教員1～2人

表1 「臨死期のケア」討議 実習記録からの学習内容

カテゴリー	サブカテゴリー	表 題	コード数	
身近な死に関する体験	身内の死別体験時の思い	本人の意思に添えず何もできず後悔	14	
		悲しくて喪失感	5	
		家族に慰められ自分を責めなくなる	3	
		亡くなった本人の意思を尊重し気持ちが軽い	2	
	年齢や関係による身内の死の体験の受け止めは違う	子供の時の死は理解できない	9	
	高校生の友人の突然の死は信じられない	3		
	中学・高校生の時に死を実感	2		
大学生の時、生前にしてあげればと後悔	1			
死後の家族の思い	死別体験の家族としての医療者への思い	医療者の不適切な対応	7	
		医療者とよい関係でよい看取りができた	2	
	死別体験を話すことの意味	その時の思いを確認できた	2	
	家族の立場での思いになる	2		
	家族のがん体験から	再発の不安への家族の姿は切実 がんに関心	3	
	実習での看護学生として対応	臨死期に側にいることしかできない	4	
精一杯生きた患者を感じた	2			
遺族の言葉に救われた	1			
死後の家族の思い	家族の後悔、罪悪感	看取れない・約束を果たせない場合の後悔	13	
		死後の喪失感	4	
		家族の様々な思い	3	
	十分な看取りが後悔を少なくする	希望や意向を大切にできること	8	
	臨死期の迎え方が心の回復に影響	4		
	穏やかな死に顔	2		
	医療者や周囲の人の対応に敏感	誠実な対応に家族は救われる	9	
医療者に声がかげにくい	3			
不誠実な対応に家族は傷つく	2			
信頼関係の中での個性	信頼関係の中での個性	日頃の誠実な対応から思いが伝えられる	8	
		家族の希望が引き出せる信頼関係	6	
		関係作りから臨死期のかかわりが可能	6	
		信頼関係の中での最期の言葉	5	
		つらい時の心遣いがうれしい	3	
臨死期の看護	患者・家族にとって悔いのない希望に沿う看護	患者・家族が主役の遣り残しのない最期	10	
		その人らしい臨死期のケア	11	
		告知とインフォームド・コンセント	9	
		患者・家族の苦痛に対応したチーム医療	4	
	家族が一番近い存在	家族が一番近い存在	キーパーソンを支える	8
			グリーフケアの必要性	6
			患者の望みを家族と協力してかなえる	5
			ケアを促し傍らにいられる配慮	2
	死の受容過程の段階にあったケア	死の受容過程の段階にあったケア	場面にふさわしい具体的支援	10
			死へ経過による受け止めのちがひ	10
段階にあったケアで負担を軽減			8	
不安苦しみを表出できる関わり			7	
希望に沿って目標の共有			7	
看護職として最大限可能な援助			6	
死期を予感した精神的苦痛	5			
別れの場としての時間・場所など環境の提供	別れの場としての時間・場所など環境の提供	患者・家族の十分な別れの環境への配慮	17	
		家族は葬儀が気がかりで十分悲しめない	3	
死後のケア	死後のケアへの家族の参加	家族との最期のケアとして	10	
		患者のその人らしさを知っている	5	
		家族にとっては複雑な心境	3	
	生前のその人らしい姿に整える	生前のその人らしい姿に整える	希望や信仰、その人らしさを大切に	17
			死者の尊厳を守り丁寧に行う	17
			家族の思いを配慮	6
死後の処置には目的と意義がある	3			

死の意味	人にとっての死の意味	死生観はどう生きるかということ 様々な思いがある 死にいく人はだれかに側にいてほしい 死はこわいことばかりではない	6 5 3 2
	望む死の迎え方	その人の人生が反映されそれぞれに違う 自分ならこうしてほしい 子供への死の準備教育の必要性 元気な時に意思確認	6 5 4 3
討議からの学びと発見	他学生の体験からの学び	他学生の体験から患者家族の苦しみを知った 身近な体験がなく実感がわかない 家族や自分の死について考える機会 ニーズに対応したケアの必要性の理解 本や資料など臨死期に関する学習方法	11 9 7 4 4
	体験を看護に活かしたい	学生個々の体験から死の感じ方考え方は多様 家族・学生の立場での議論を活かそう 後悔した家族体験を活かそう	9 6 5
看護職としての今後の課題	敬虔な気持ちで患者・家族の立場にたった看護	臨死期のケアで大切なこと 死に慣れることなく敬虔な気持ちで 家族の立場にたった看護 後悔のないケア 死生観、感性を深めたい	14 13 6 5 5
	看護職である自分の感情	感情を無理にこらえる必要はない 貴重な瞬間に精一杯の資質を活かそう 限りある生を肯定し可能性を信じたい	10 11 6
	人の死の重大な場面に関わる覚悟	生の最終過程に関わる職業、誠実に関わる 多大な要求に気遅れしそうだ	10 1
	現実には困難も多い	理想はよいが実際は困難も多い 患者にとっては疑問と思えることもある	7 6
コード数合計			507

『身近な死に関する体験』では、直接の体験、家族としての立場から「身内の死別体験時の思い」「年齢や関係による身内の死の体験の受け止めの違い」「死別体験の家族としての医療者への思い」「死別体験を話すことの意味」などがあり、身内の死では祖父母の死の体験が多く、両親や自分がその死の場面で悔いを残した体験、医療者の不適切な対応に傷ついた家族としての体験を多く記述している。家族としての経験から看護職を目指す立場として医療者にはこうあってほしいという思いが強く現れていると思われる。また学生が死別を経験した年齢により、死の受け止め方にはちがいがあがる。わずか2人であるが臨地実習で受け持ち患者の死を経験した学生は、何もできなかった自分を感じながらも患者の最期まで懸命に生きる姿に接し、患者・家族の言葉に救われた体験を伝えることで自分にとっての意味を見出し、また実習グループの他の学生はその体験を聞くことで多くを学んでいる。このように終末期の患者を受け持つ機会がある場合は、受け持ち学生一人の学習に留まらずグループとしてのカンファレンス等で可能な学習ができるようにしている。

『死後の家族の思い』では、討議を通しての家

族の思いを知り記述したものである。「家族の後悔・罪悪感」「十分な看取りが後悔を少なくする」「医療者や周囲の対応に敏感」「信頼関係の中での個別性」があり、亡くなった身近な人に対して家族が後悔や罪悪感を持っている。一方では十分な看取りが後悔を少なくし遺族の心の回復にも繋がっている。また、療養中の患者・家族は医療者の対応に敏感になっており、「誠実な対応に救われる」「医療者に声がかけにくい」「不誠実な対応に傷つく」というような内容を記述している。

このように『身近な死に関する体験』と『死後の家族の思い』のカテゴリーでは、身近な死別体験とその話を聞くことを通して、家族としての心理を具体的に理解することで、自分だったら、家族であったらと立場を変え、看護職として何が求められているかを考えている。

そのような学びを通して次のカテゴリー『臨死期の看護』は4つのサブカテゴリーに分類された。「患者・家族にとって悔いのない希望に沿う看護」、「家族が一番近い存在」、「死の受容段階にあったケア」、「別れの場としての時間、場所などの環境の提供」があり、患者・家族が主役として遣り残しのない最期を可能にするその人らしい臨死期

のケアが必要であること。告知やインフォームド・コンセントの重要性、患者・家族の苦痛に対応したチーム医療の必要性を述べている。また臨死期に重要な役割を持っている家族に対して、キーパーソンを支えることや、患者の望みを家族と協力してかなえること、家族へのグリーフケアの必要性をあげており、家族の存在の大きさと家族への支援の重要性について考えることができている。これらは家族看護学での家族の機能と終末期看護での家族ケアの重要性についての講義の知識も活かされているものと思われる。

また患者・家族の死の受容過程に沿った看護として、死への経過による死の受け止め方のちがいや場面にふさわしい具体的支援の必要性、不安や苦しみを表出できる関わりや、患者・家族の希望に沿って目標を共有し、看護職として最大限可能な援助を行うことをあげている。臨死の場面では患者・家族の十分な別れの環境や、死後も家族は葬儀が気がかりで十分悲しめない状況に対して、一般病棟での物理的環境の制約条件の中での大切な時間を過ごす患者・家族への配慮の重要性について述べている。これらの内容は、病棟実習で直接感じた療養環境の制約条件下でのケアから考えている。これらの内容は前の『身近な死に関する体験』『死後の家族の思い』カテゴリーとの関連で、医療者としての臨死期に臨む看護者の役割を捉えているものと推察される。

次に『死後のケア』では、サブカテゴリーとして「死後のケアへの家族の参加」「生前のその人らしい姿に整える」があり、家族の最期のケアとして、生前の患者を知っている家族の参加は意義があることを理解している。また患者の希望や信仰、その人らしさを大切にし死者の尊厳を守り丁寧に敬意を持って行うことが重要であると述べている。実際に死後のケアを実習中に実施または見学した学生は2名であり、多くの学生はVTRの視聴を通して初めて具体的な方法を知ることになる。そのため、この討議を通して死後の処置の目的や葬送儀礼に関連した独特の意味があること、家族にとっての死後の処置の参加の意義についても考えられるようになっていく。

死生観に関わるカテゴリー『死の意味』では「人にとっての死の意味」「望む死の迎え方」があたり、死生観はどう生きるかということであり、死にいく人はだれかに側にいてほしい思いがあると

述べている。また、死はこわいことばかりではないなど、討議を通して現在の自分が死に関して考えていることを記述している。また、望む死に方として、その人の人生が反映されそれぞれに違うものであり、自分ならこうしてほしいと述べるものや、子供への死の準備教育の必要性や、元気な時に死に対する意思確認が必要であるとし、寺本の文献「患者の遺した最期の言葉」からその人の人生を想像し、それぞれに違う人生の最期があることを理解している。また自分の子供の時の体験から、子供なりの死の受け止め方があり臨死期に情報を与えられなかったり、場を外されたりせず死の準備教育の機会が与えられることがその後の受け止め方に影響することを記述している。

死についてはこのように看護職としてケアの提供時の対象の死のみならず、自分自身にとってというように具体的に身近に引き寄せ理解することが重要である。

臨死期のケアの討議を通しての『討議からの学びと発見』では、青年期の学生の中には身近な死の経験を持たない学生もおり、他の学生の体験から患者・家族の苦しみを理解した学生もいた。また家族や自分の死について考える機会となったり、看護職としてのニーズに対応したケアの必要性が理解でき、本や資料など臨死期に関する学習方法があることがわかったと記述している。また身近な体験がない中で実感がわかないという率直な感想や考える機会になったとも記述している。「体験を看護に活かしたい」では、学生個々の体験から死の感じ方は多様だが、家族体験や家族・学生の立場での今回の議論を活かそうと思うなど、死に関する学生の経験内容はちがうが、討議を通しての看護職としての学習の方向性が記述されていると考える。

『看護職としての今後の課題』として「敬虔な気持ちで患者・家族の立場にたった看護」では、臨死期のケアで大切なことをあげ、また「死に慣れることなく敬虔な気持ちで」〈家族の立場にたった看護〉〈後悔のないケア〉〈死生観、感性を深めたい〉がある。「看護職である自分の感情」には、〈感情を無理にこらえる必要はない〉〈貴重な瞬間に精一杯の資質を活かそう〉〈限りある生を肯定し可能性を信じたい〉がある。

討議の場で学生が特に関心を持っていたのは、看護職は死の場面に多く関わることで人の死に慣

れてしまうのかということと、看護職は自分の感情を出してはいけないのかということであった。討議の中では、学生はそのことに対してそれぞれの考えを述べ、教員も看護職としての経験を話すこともある。討議を通して学生は自分の感情を押し殺すこともなく、経験を積むことで死に対して様々なことを思い、よいケアができる、多くの事例を経験していることでその場面に適切で個別的な関わりが可能になると感じたことと記述している学生もいる。

また人の死は慣れるとか慣れないとかの簡単なものでなく、患者・家族に対して敬虔な気持ちで誠実に対応したいということである。「人の死の重大な場面に関わる覚悟」として、〈生の最終段階に関わる職業、誠実に関わる〉〈多大な要求に気遅れしそうだ〉と、「現実には困難も多い」として、〈理想はよいが実際は困難も多い〉〈患者にとっては疑問と思えることもある〉のように、人の死に関わる職業としての覚悟や、多大な要求への気遅れなど正直な思いを記述している学生もいる。またそのようにありたいと思いつつも、現実の困難な状況や様々な立場からの思いの違いにより患者にとっては疑問と思われる状況もあることなど冷静に見ている記述もある。

2) 討議法を取り入れての効果

討議の中で大切にしたいのは、学生の立場として自己の体験から一方的に臨床の現状を批判するのではなく、終末期のケアにふさわしい環境が現実には整っていない中で、自分や家族だったらどうか、現状をよりよい方向へ変えて行くには自分はどうしたらよいかを考えることで、今後の臨床での看護職としての実践に繋げていくことを期待している。

討議法の意義について、広瀬は看護基礎教育における教育技法としての討議法から学生は内なる自分自身との対話や自己の思考過程の明確化を経験しながら、思考に柔軟性を持たせたり、幅や厚みを加えたり、また深化させながら能動的な学習能力を獲得していくと述べている³⁾。この意味で学生は個々の体験を通しての考えと他者の経験や考えから、臨死期のケアに関する学習内容を深めていくことになる。

学生は臨死期のケアの重要性がわかり肯定的に死を捉えることができることで個人の人生の大切

な瞬間に看護職として出会い、看護はその後の家族の心にも影響を与えるほど重要な役割を持っていることを学んでいる。

以上の結果から、本討議の目的は概ね達成されていると思われる。

3) 今後の課題

成人看護学では2年次に終末期のケアの基本的内容を講義として学習する。終末期にある人の援助を実習の中で学習することの困難さについては前に述べた。そのような中でも可能な方法で学習する機会を作る必要がある。平成16年3月の看護学教育に関する在り方に関する検討会報告⁴⁾にある看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標の中の実践能力の構成のⅢ群・特定健康問題を持つ人への実践能力に、終末期にある人への援助が挙げられている。終末期の看護については、成人看護学のみならず他の看護領域の学習内容や、本学の改定カリキュラムでの新しい科目「死と看護」の科目とも関連させ、どのように学習させるのかの検討が必要である。成人看護実習では平成17年度から1日ではあるが終末期のケアを専門とするホスピス病棟での実習が可能となった。討議だけでなく、看護実践の場での学習により具体的な理解が可能になることを期待している。

看護職は対象の亡くなる経過や場は様々であるが、多くの人の死に出会い看護の役割を必要とされる。また個人の人生においても必ず肉親や大切な人との別れを体験する。それらの体験も看護職としての人間観、家族観、死生観、看護観に影響するものであり、今後も看護職として将来にわたって深く考え続けていくことを願っている。

また死後のケアは、死後の処置の方法や手順だけではなく臨死期から死、死後の家族へのケアも含めて学習する目的を持ち、近年は死化粧としてのエンゼルケアにも関心が持たれており、小林光恵著編集「ケアとしての死化粧」⁵⁾を学生へ紹介している。死後のケアは単に死後の処置ではなく、よりよい臨終の場面での対応や一連の取り扱い、お見送り、遺族のグリーフケアの必要性までを含むものであり、死別後の家族のケアへの視点も合わせた学習方法を検討していく必要がある。

おわりに

成人看護実習に「臨死期のケア」討議を学習方法として取り入れ、学生レポートから学習の記述内容を分析した結果、507のコードが得られ24のサブカテゴリー、7つのカテゴリーに集約された。直接の家族体験や臨地実習での体験が少ない中で、具体的に学習する方法としての討議は、他者の体験や資料、また討議過程を通して学生の思考を深化させていく経験となっていることが分かった。

これらの結果を今後の改定カリキュラムにおける成人看護学教育の内容、学習方法の検討に活かして行きたい。

引用文献

1. 大島弓子：病院で看取る患者さんの死についての考察, 「特集 患者さんを看取る」, 月間ナーシング Vol. 22 (11), pp. 18-21 学研, 2002
2. 寺本松野：患者さんの遺した言葉, 日本看護協会出版会, 2003
3. 広瀬信子：討議法を取り入れた学習法—全体解説, 村本淳子編集, わかる授業をつくる看護教育技法—討議法を取り入れた学習法, pp. 7-10, 医学書院, 2001
4. 看護学教育の在り方に関する検討会：看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標, 看護学教育の在り方に関する検討会報告, 2004
5. 小林光恵編著：ケアとしての死化粧—エンゼルメイク, 日本看護協会出版会, 2004